

自然遊びにおける自立的行動の獲得過程について

自然の中での熟達者と子どもの相互作用から

清水一巳[千葉敬愛短期大学]

キーワード：自然遊び、身体的同調、自立的行動

1. はじめに

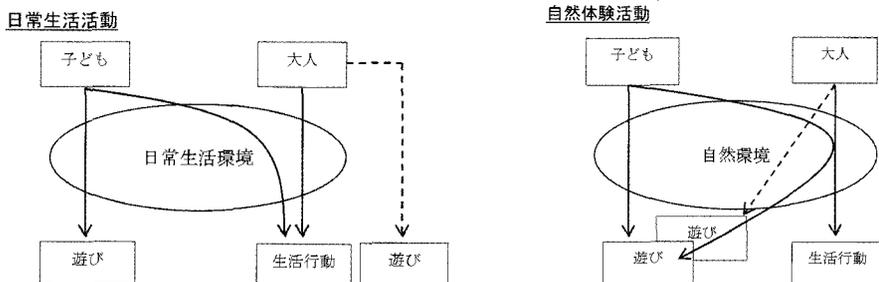
「子どもの自然体験」が語られる場合、大きく2つの側面が取り上げられることになる。生涯学習審議会（文部科学省）の答申（1999年）において「自然体験が豊富な子どもほど、道徳観・正義感が充実」していることが挙げられている。ここでは、「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」、「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」、「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと」といった直接的な体験として「自然体験」という言葉が使われている。そして、このような「自然体験」は生活体験とも関連しており、「自然体験が豊富な青少年ほど、生活体験も豊富な傾向が見られ」（国立青少年教育振興機構,2015）るという指摘もなされている。

また、子どもの自然体験について、同答申において、1999年の時点で「これまでは学校引率中心の自然体験プログラムが広く見られました」と指摘され、これからの体験活動について「地域社会が担い手となる子どもたちの活動は、自然体験の先輩である地域社会の大人たちとの交流や学年を超えた異年齢の子どもたちが一緒に活動できる」といった観点からも、優れた内容を提供することが可能であると述べられている。これが「自然体験」の二つ目の側面であり、自然体験における「関係性」に言及しているといえるだろう。また、この「自然体験」の関係性に関するものとして、家族の影響も指摘されている。山本氏（2005）は幼稚園の子どもの自然体験の特徴の一つとして、「（調査対象の幼稚園の保護者が）自然体験活動に対する関心が高く、子どもたちにより積極的に自然体験活動を行なうよう促している」ことを明らかにしている。この保護者層について、子どもの遊びについて、「昔から伝わる遊び、身体を使う遊び、自然に触れ合う遊び、生き物と触れ合う遊びを大切に考えている」（清水,2015）ということを示し、（大人自身の）子ども期の体験とのズレを指摘し、「子どもの『遊び』の枠が狭められている危険性」を指摘している。

本報告では、この「自然体験」の二つの側面の関係性を整理しながら、自然との関わりの中で自立的行動が生成されてくる過程を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の枠組みと方法

1) 「自然体験」を捉える枠組み



2) 方法

子どもを対象とした自然体験プログラムにおいて、自立的行動を引き出すことを目的として、人的環境、物的環境を設定した。そこでの参与観察おける記述記録およびビデオ記録から子どもの行動の意味を解釈していく。

①自然体験プログラムについて

- (1) 調査対象：「子どもの自立キャンプ」プログラム
- (2) 実施主体：NPO ケアラボ（ファミリーコーチプログラム）
- (3) 実施期間：平成 27 年 8 月 19 日～21 日（2泊3日）

今年度で7回目となり、昨年までは3泊4日のプログラムで実施していた。

- (4) 参加者：2才（親子）から12歳の子どもの参加者（12名）、学生サポーター（4名）
スタッフ（野外活動関連資格者2名）、事務サポートスタッフ（2名）
*この他にも、山中散策時には、地元の山野草に詳しいボランティア、創作活動では地元の陶芸家のサポートを受けた。
- (5) 目的：子どもの自立的行動を引き出すことを目的とし、子どもが直接的自然体験ができるように環境整備をスタッフが担当し、衣、食、住の生活行動をおこない、選択的に関わってきた子どもと一緒に、活動することを行動原則としている。学生サポーターは、それ以外の遊びに対しても関わりを持つが、子どもと一緒に遊びを選択し、関わってくというスタンスを取っている。
- (6) 調査方法：参与観察および記録（主にビデオにて定点記録をおこなった）、子どもへの聞き取り調査

3. 自然体験プログラムにおける子どもの活動の観察

自然体験プログラムの観察から子どもの自立的行動につながる事例をもとに考察を行う。事例1は、自然に囲まれた環境に入った初期の段階から、野菜の収穫、虫の採集などの行為を通して、子どもの遊びに変化がみられてきた事例になる。事例2は、大人が手を加えた環境の中で、子ども同士の遊びがつくられることで、大人との距離がとられるようになった事例。そして、事例3は、山中散策の中で、大人との関わりにより自然との距離が縮められた事例となる。これらの事例を読み解くことにより、子どもと大人、自然の三項がどのように絡み合いながら子どもの自立的行動を生成してくるのか探っていく。

[事例1] 野菜と虫（チョウ）の採集

- ・収穫量（大きさ、数）への興味
- ・採集数から採取自体への楽しみの変化

[事例2] スラックラインと手づくりブランコ

- ・ブランコ、スラックラインの周期的動作への身体と同調
- ・子ども同士の同調と大人との距離化

[事例3] 散策中の野いちごと草笛

- ・大人との関わりによる身体を通した自然への気づき（味わう、草を口にする行為）

*別途、分析、考察資料および参考文献等資料を配布し、発表を行います。